

第2回中間報告

(報告期間 2015年12月17日～2016年3月17日)

基本情報

派遣クラブ：広島東ロータリークラブ

カウンセラー：市川 太一 先生

受け入れホストクラブ：Rotary Club of Streatham

カウンセラー：Mrs. Chan Bisessar

国際ロータリー第2710地区 2015-16年度グローバル補助金奨学生

大平勇也

報告書提出日：2016年3月17日

教育機関・専攻分野：キングスカレッジ・ロンドン 中東学部紛争解決コース (修士課程)

MA Conflict Resolution in Divided Societies in the Middle East and Mediterranean Studies
Programme at King's College London

3月半ばを過ぎ、曇り空が多いロンドンでも日中、日が照ることも多くなってきました。所属するキングスカレッジ・ロンドン中東学部紛争解決学科修士課程の授業日程も残り2週間をきり、残り僅かとなった大学院での授業をかみしめる様に受講している今日この頃です。今回の第二回中間報告では、昨年12月16日提出の第一回中間報告時から現在までのロンドンでの大学院生活と、同期間に参加したロータリー活動を中心にお伝えしたいと思います。

1.学業面での成果

論文作成について：前期に提出した三つのエッセーの採点が全て返却されました。成績は distinction, merit, pass の三段階評価で、「イスラム運動—ジハードと革命」で merit、「イスラエル・パレスチナ紛争の歴史」、必修科目の「分断された社会における紛争解決」ではそれぞれ pass でした。「イスラム運動—ジハードと革命」ではパレスチナのイスラム武装組織ハマスの穏健化可能性について論じました。パレスチナ、ガザ地区を制圧するハマスは同組織をテロ組織と見なすか否かも含め、常に議論的となる組織です。所属する中東学部の教授がハマスの第一人者的存在であることから、その方の書籍を読んだり、関連する論文をあたったり、同組織のホームページをチェックするなどして情報収集を行い論文作成に取り組みました。

一つにつき 5,000 ワードの論文を書き上げることは大変で、冬休み期間は大学図書館に通いつめ、自分の集中できるスペースをみつけて執筆に当たりました。頭の中は常に論文のことでいっぱいであったので、スコットランドのエディンバラに一週間旅行していた際も、エディンバラ大学の図書館を利用するなどして論文作成に時間を割いていました。3月半ばを迎えた現在も同様に、第2セミスター後に提出しなければならない論文三つの作成に加え、修士論文の構成について担当教官に草案を提出するなど、取り組まなければならないことが多い状況です。

大変な論文作成ではありますが、履修している各授業で担当教員との面談の時間が設けられていますので直接アドバイスを受けることができます。教員の方からご助言をいただくことでエッセーの道筋をつけることができるので、面談の機会は大変有意義です。また、私のような決して論文の出来の良くない学生でも、できていない点に関して辛辣なコメントをするのではなく、「どうすれば今より論文がよくなるか。」を文章構成やキーとなる文献の紹介を交えて教えてくださいます。そのことにより面談に余計な緊張感なく、聞きたいことを質問することができます。英国のすべての大学の学科がこのように親身に面談をしているわけでもないようで、他の学部に通う友人から面談で傷つく思いをしたなどの話を聞いても、先生方が親身なキングスカレッジ・ロンドン中東学部で学ぶことができ本当に良かったと感じます。(写真は大学図書館 Maughan Library 最上階からの撮影)



第2セミスターの授業について：第1セミスターに比べて授業密度が上がってきているように感じます。前期から引き続き開講されている必修科目「分断された社会における紛争解決」ではシリアやイラク、パレスチナ・イスラエル、リビア、北アイルランドなどの紛争を和平交渉のセッティングをもとに、事前に指定された外交上の人物を務めてきました。リビアの回など、授業回によっては全く見当もつかない役割を任されることもありましたが事前にインターネットなどで担当する人物の政治的立ち位置を把握することで自分の果たすべき役割をある程度果たせたように思います。紛争学科の教授陣曰く、「全く不慣れな紛争情勢を知ること、またその過程で慌てること自体」に学ぶことの意義があるそうです。また、和平交渉シリーズ最終回となったパレスチナ・イスラエル紛争の回では、自分の興味のある分野であるため、積極的な役割を果たせたと思います。

第2セミスターも第1セミスター同様2つ選択科目を履修しているのですが、その内、中東の国家創設者などを各授業一人ずつ学習する「国家創設者と革命—現代の中東におけるリーダー」の授業ではエジプトのゲマル・ナセル、パレスチナ自治政府のヤサエル・アラファト、「トルコの父」として知られるムスタファ・ケマル・アタタークなどの人物像と政治的役割

について学習していきました。同授業は歴史学の趣が強い授業で、個人的には履修している科目の中で一番授業参加しやすいように感じました。扱うテーマが歴史的事情であることから、ある程度現在の緊迫した紛争課題から距離をおくことになります。そのことにより、実際の授業においてもある種の緊張感のようなものから切り離され自由に発言できるように感じます。毎回予め振り当てられたチームごとに課題が与えられ、5分間の発表をするのですが、私はゲマル・ナセルやヨルダンのキング・フセインの回でスピーチを担当しました。講師を担当する Simon Waldman 博士は昨年大阪大学大学院で特別講演を開催するなど、親日な方で、第1セミスターから現在まで親切にさせていただいたことには感謝のほかありません。もう一つの選択科目である「宗教と紛争、平和構築」の授業ではイスラエル・パレスチナ紛争を中心とした紛争を宗教の観点から分析しています。例えば、一般的にイスラエル・パレスチナ紛争は「土地争いの紛争」であり「宗教戦争ではない」と広く知られているのですが、その紛争の過程では、宗教が紛争の象徴的役割を果たしてきているのもまた事実であります。そしてそのことが聖地エルサレムの紛争における重要性に繋がっているとも言えるでしょう。授業ではこのような紛争における宗教の役割を論じています。各生徒に20分のプレゼンテーションが課されるのですが、私は「イスラム教とキリスト教における拷問に対する慣習」を選択し、授業で発表しました。

中東学部での学習生活全般について：前回の報告書の中でもレポートいたしましたでしたが、周りとは”学生”の皆さんは既に世界を率いている方が多くいらっしゃいます。皆さん、友人のようにやさしく接してくださりますが、周りの生徒は私とは違う立場に居られる方ばかりです。そのことから、授業で発言するのであればそれ相応の学習・練習を行うのが礼儀であると認識し、毎回の授業の準備には時間をかけてきました。60分のディスカッションの中で自分が話せる時間は総計2分間もあればいいほうですが、知識を限られた時間で凝縮して表現することができるように、授業前日にはリーディング課題の他、関連するインターネットの記事を読んだり You Tube で専門家のしゃべっている様子をシャドイングするなどして練習に明け暮れました。

授業は流れの中で展開されますので、全く自分の思うことが言えなかつたりすることもしばしばあったのも事実です。また中東学部の場合、採点基準はエッセイが100%を占めますので、授業では無理に発言する必要もありません。しかしながら、ディスカッションが好きであること、キングスカレッジ・ロンドン中東学部のような最先端の教育機関における発言機会が人生で「二度と巡ってこないかもしれない」かもしれないとの認識から、授業に際しての準備は全く苦になりませんでした。授業での積極的な発言によって、今後の自分の何かにつながることもないかもしれませんが、授業後に親しくしてくださる生徒の方からお褒めの言葉をいただいた時には、もうそれだけで十分勉強した甲斐があったと感じます。

日本の教育制度では討論に割かれる時間が少ないとは言われて久しいですが、授業で積極的に発言を繰り返す中で、「そういえば自分は真にこんな学習が好きだったな。」と感じることが多々あります。というのも、私の小学生時代まで遡りますが、当時の社会科担当の先生は、ユニークにも調査・ディスカッションに基づいた教育を実施されていました。当時、周りの目などを気にすることなく授業での発言など熱中していた自分でしたが、不思議なことに今こうしてキングスカレッジ・ロンドンで授業に参加していると、その時と同じ作業を同じ気持ちでいることに気が付きました。これは当時の社会科の先生の授業や中東学部での学びが真に知的欲求をくすぐるように構成されているからだと思います。

加えて、日本にいるときに BBC などの国際ニュース放送を視聴し、「このような機会ですべての関心度が高い話題をしゃべることができたいのに。」と夢のように思っていました。今実際にメディアに出演されている生徒や先生方の前で自分の発言する機会を与えられていることは授業準備に対する大きなインセンティブとなっています。コース終了後に悔が残ることだけは避けたいので、この今一瞬のために、残りの2週間も論文作成だけでなく、日々の授業準備にも力を入れていきたいと思っています。

授業外活動について: 時間の余裕があれば大学のディベートクラブ (KCL Debating Society) に参加しています。前回の報告でもお伝えしましたが、自分は日本でも決してディベートが上手いというわけではないのですが、長く続けてきて、現在毎週大学の練習会に参加していること自体、私にとっては大きな成果です。また練習会とはいえ、例えば勝ったときには、正直うれしいです。また、最近の趣味としては大学付属のジム通いが挙げられます。事前コースではよく同じ寮にいた中国人の友人たちとサッカーやバスケットボールをしていましたが、新しい寮に移って以降現在その様な機会はありません。そのため、運動不足解決のために大学のジムに通い、翌日の授業に関する音源を聴きながら走るなどしています。ジムでは必ずといっていい確率で知人に会うので、それも実はジムに行くことの一つの楽しみです。

2月下旬には、私と同じく第 2710 地区からロンドンに派遣されている藤村さんが積極関与されている **Refugee Rights Data Project** (民間の難民の人権調査団体) を通じてフランスの港町カレーの難民キャンプ、通称「ジャングル」でインタビュー調査をする機会をいただきました。

同団体へのボランティア申請は正規申込期間から遅れていたのですが、藤村さんに手配していただいたおかげで参加が認めていただけました。藤村さんにこのようにお手続きしていただいたことについては、只々感謝です。キャンプで聞き取り調査を実施したアフガニスタンなどの中東地域やエリトリアなどアフリカからの難民の方々は母国の混乱の中、フランスではなくイギリスに渡りたいという希望をもっておられました。一人につき 30 分近くかかる調査でしたが、難民の方々に調査の過程で、ロンドンでは普段感じることの少ない人の温かみを感じました。そして、そのことは現在でも非常に印象的です。例えば調査終了後にサッカーやクリケットを通じて彼らと無垢に騒いだことは純粋に楽しかったですし、調査をしたパキスタン人の方から写真で私が着用しているクーフイーヤと呼ばれるスカーフをいただいたときにはそのこと自体が信じられませんでした。クーフイーヤには宗教上、人を困難から守ってくれる役割があるそうですが、それを着用しない彼が、これからも守られて生きていかれることを願うのみです。



難民調査に関連してですが、ロンドンでも亡命希望者を対象者とした炊き出しにボランティアとして参加する機会がありました。出会った方々は、「いつになれば申請が通過するのだろうか。」や「亡命申請が認可されるのは非常に難しいことだ。」などと嘆いておられました。イギリスにおける難民や亡命希望者の受け入れ基準はどうやら厳しいようです。

2.受け入れ地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

前回の中間報告投稿から引き続いて多数のロータリー活動に参加する機会をいただいております。以下に、参加したロータリー行事を写真とともに紹介いたします。

1月19日に行われたキングスカレッジ・ロンドン、ローターアクト設立記念パーティーに参加した際の様子。ロンドン大学群では King's College London が Imperial College London に次いで二番目のローターアクト設立だそうです。同パーティーにはローターアクト会員の知り合いの方のお誘いで参加いたしました。また、その方が参加する **Rotaract Club of Wandsworth** の定例会にも参加させていただく機会がありました。



現地受け入れ先クラブである **Rotary Club of Streatham** 夕食会でのトークの様子。今回は前回に **Rotary Club of Tooting** でのトークよりもカジュアルな、自分自身の広島での生活などをお話しさせていただきました。既にクラブの皆さんとの交流は多いですが、この会でもロータリーの皆様と楽しくお話をすることができました。ちなみに **Chan** さんのくださった文章によると **Rotary Club of Streatham** はロンドンのロータリークラブの中でも最も歴史のあるクラブの一つであり、米国からポール・ハリス

が来英時に尋ねたクラブの一つでもあるそうです。2月27日にはそんな歴史ある Rotary Club of Streatham の設立記念パーティーにも参加させていただきました。また、今月下旬には Rotary Club of Dulwich & Peckham の夕食会でお話しをする機会も頂戴しております。

クリスマスには Chan さんのお誘いでロータリークラブのお年寄りのためのクリスマスパーティーのボランティアをする機会をいただきました。「クリスマスを一人で過ごすお年寄りの数を 0 にしよう。」という声のもと約 400 人の参加者と、それに迫る数のボランティアが大会場に集結していました。私自身もですが、ボランティアを通じてボランティアする側も救われるのだと感じました。写真は会場で知り合ったロンドン在住のボランティアの方と会場で撮影したものです。



元日には今年で第 30 回目となる London's New Year's Day Parade 2016 にロータリー1130 地区から参加させていただきました。ロンドン中心部のピカデリーサーカスなどを経由しウエストミンスター寺院まで続くパレードの様子はイギリス国内で生中継された他、海外でも国際放送を通じて放送されたとのこと。このような機会に呼んでいただきうれしい限りです。

写真 2 枚目中央のご婦人は現地受け入れ先ホストの Chan さんです。同パレードには毎年参加されているとのこと。また、写真左のロータリアンの方はスコットランドの首都グラスゴー出身とのことで、スコットランドとイングランドの文化の違いなどのお話をいただきました。



2月15日に Radlett Cricket Club で行われた夕食会の模様です。冬休み以降に開催された唯一の奨学生を対象とした夕食会でした。会場はロンドンを北上した Radlett という小さな町で、クリケットをモチーフとするユニークなロータリークラブでの開催でした。冬休み以降唯一の奨学生を対象とした夕食会です。

3. 直面している課題



前回もお伝えしたように Finchley という北ロンドンの住宅街に位置する学生寮から大学まで 1 時間半近くかかるなど、もちろん問題はたくさんあるのですが、そのどれもが大事に至らない程度です。大学寮はよくお湯が出なくなる、スーパーが付近にないなど確かに不便な側面も多いですが、家賃が安いので、寮選択が自分にとって適切であるとは今でも思っています。不便な寮にあって楽しい生活を過ごすことができている理由の一つに、気の合う友人がいることが挙げられます。写真のパキスタン人のルームメイト、Bilal は UCL で物理学を学んでいるそうですが、一般的な物理学性のイメージとは正反対に社交的で明るく、毎日のように会話をしています。冬休みには彼のパキスタン人の友人と食事に行くことなどもありましたし、最近は近くのレストランと一緒にケバブを食べに行きました。写真は野球(クリケット?)をしているところです。

寮のこと以外にも問題は日々生じるものですが、一年間ロンドンに滞在しているだけで、そのような不自由を感じるのはむしろ当然であると思います。日々浮上る問題に対応しつつ、どのようにそれにすれば効率的にそれに対処できるかコツをつかんでいくという作業の繰り返しです。

4.今後の目標について

目標としたいことは沢山ありますが、その中から現実的に自分が参加できることは限られています。例えば授業、エッセー作成の忙しさから、インターンシップはこれまでにできるはずもなく、しかし、だからといっていい成績を修めているわけでもありません。他学部の知り合いにはアルバイトをしている生徒がいるなどと聞きますが、自分にはその余裕はありません。また、学業をおろそかにすること自体が、折角合格をいただいた学部に対して失礼に当たるように思います。中東学部全体で 50 人、学科も十数人の少人数であることもあり、教員の方々に自分のことはもうしっかりと覚えられていますし、本当に感謝に尽きません。教員の方々を失望させないためにも、当然ではありますが今後も学問への取り組みに全力を注いでいきたいと思っています。



(写真左) 旅行先のパリ 凱旋門 で知り合いになったアルゼンチン人旅行者と。

(写真右) キングスカレッジ・ロンドン、シンガポール人会の演劇鑑賞後に友人と。